

263. 「いわゆる甲良甕」に関する基礎的研究

1. はじめに

1985年以降、犬上郡甲良町周辺の景観を一変させる
ば場整備や道路改良が行われ、それに伴う発掘調査が
増加した。その中で、体部外面に明瞭なタタキ痕がみ
られ、2次焼成を受けた外面にススが付着する甕の破
片の存在が知られるようになった。調査者の間で「甲
良町域で多く出る甕」ということで、「甲良甕」あるい
は「犬上甕」と俗称され曖昧に認識されてきた。しか
し現在にいたるまで「いわゆる甲良甕」についての研
究はなされていない。

今回この甕を検討するのは「湖東地域」をより理解
するためである。私はかつて湖東地域に分布する「湖
東系軒瓦」を用いて地域のつながりについて考察した
ことがある(文献4)。本論に関わる点が多いため簡単
に内容を述べると、「湖東系軒丸瓦」の分布が郡の領域
と一致せず、製作技法においても郡を越えた地域のつ
ながりが想定できると言うものであり、また、その中
で他の要素を用いてさらに検討を加える必要性がある
ことを述べた。これを受けて、律令期における郡と個
別地域の関係を研究するための素材として検討を加え
るものである。なお、名称についても後に述べるよう
に分布域が甲良町やそれを含む犬上郡に留まらないこ
とからより適切な名称に変更する必要もあるが、資料
が不足していることもあり本論では「いわゆる甲良甕」
の通称を用いることとする。

2. 「いわゆる甲良甕」の形態と製作技法

出土した「甲良甕」のうち、口縁部については資料
もある程度増加してきたが、その全貌がほぼ認識で
きるのは近江八幡市御所内遺跡において出土したもの
(図2-1)のみである。ともあれ、「いわゆる甲良甕」
と認識しているものの形態についてみてゆきたい。

「いわゆる甲良甕」の形態の特徴をあげるなら、全体
形状は丸底でゆるやかに胴部の中程が張り出した中胴
形を呈し、体部外面には垂直あるいは左上がり粗い平
行タタキ、体部内面には同心円あるいは無文のあて具
の痕跡が残される。肩部外面には2段ないし3段の横
ナデ、肩部内面上半には右上がりのハケ、下半にはハ
ケを切るコテ状工具による横方向の砂粒の移動が確認

できる。口縁部はかるく外反させ、ナデによって整形
したもので、厚ぼったい感をうける。

以上の特徴から製作技法を復元するならば、まず、
半球形の祖形を作り、その上端部を内面からコテ状の
工具をあてながら外面を横になでて外反させて口縁部
の祖形を作る。口縁部の内外面からナデを施し、最後
に端部をナデで口縁部の整形を終わる。その後、内面
に同心円あるいは無文のあて具をあて、外面から粗い
平行タタキを施しながら体部から底部の曲率を作り出
す。その際に外面には垂直あるいは左上がりの粗い平
行タタキの痕跡が顕著に残される。また、タタキで曲
率を作り出すためか、体部の歪みも大きい。内面のあ
て具痕をハケのちコテ状の工具で消すものと、あて具
の痕跡が内面に残すものがある。

胎土はきめ細かなもので、クサレ礫や長石の小片を
含み、花崗岩形の砂粒を若干含むものもある。色調は
淡褐色あるいは灰白色を呈し、白っぽい発色をしてい
る。焼成は軟質で、体部外面にススの付くものが多い。

焼成方法については数点ではあるが体部に黒班のみ
られるものが確認できたことから、ヨコ置きされたも
のであると考えられる。

「いわゆる甲良甕」は胎土と色調および体部外面の平
行タタキに大きな特徴が認められ、小片でも比較的認
識しやすい。

用途については、確認できたものがいずれも2次焼
成を受けている点と外面にススが付着する資料が多い
点および破片ではあるが出土量が多い点から日常的に
使用された煮沸具であると想定できる。

3. 「甲良甕」の分布

現在、10遺跡において「甲良甕」の出土が報告され
ている(表1参照)^①。これに筆者が確認した3遺跡を
加えた13遺跡を旧郡の範囲で犬上・愛知および神崎・
蒲生の3郡にわけ、概略を述べたい。

犬上郡 7遺跡において確認され、分布の中心に当
たる。遺跡は郡域の東半に集中するが、これは調査量
の制約もあり郡域全体での評価は難しい。調査者によ
れば、報告された以外にもかなりの点数が出土するよ
うである。特に甲良地域では報告書には掲載できな
かったが法養寺遺跡において小片が大量に出土したほか、
尼子遺跡や尼子南遺跡などを挙げるができる。以上
の点を評価するならば、少なくとも郡域の東半にお

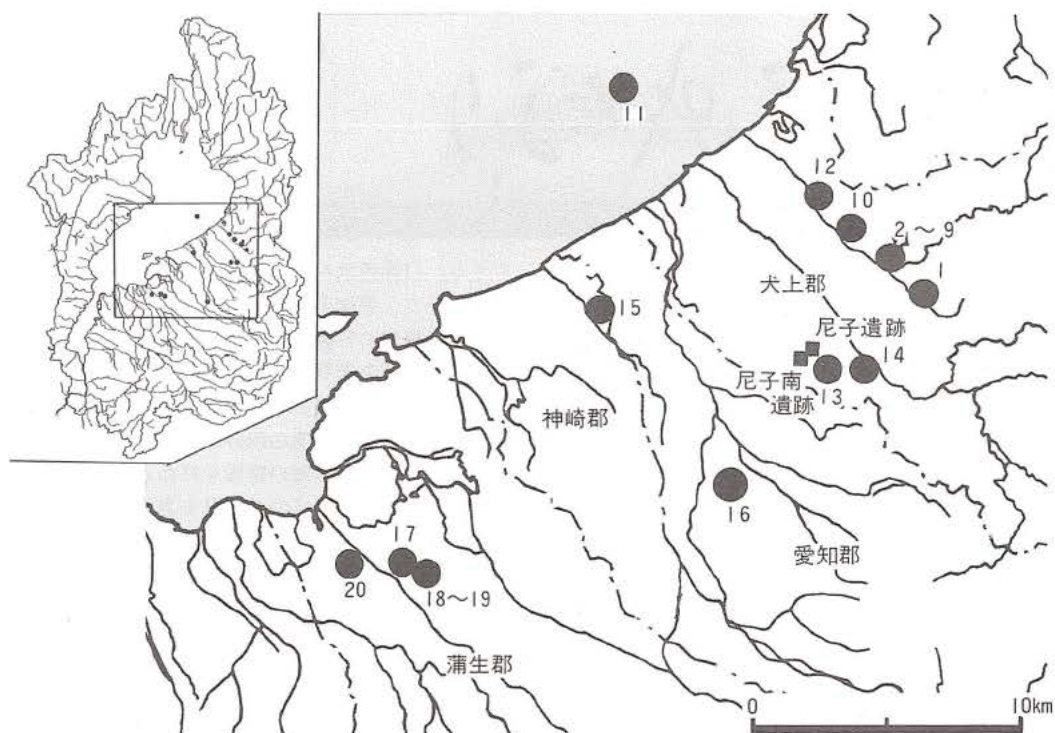


図1 「甲良甕」分布図

番号	グループ	市町村名	遺跡名	部位及び点数	共刊遺物	掲載文献	時期	備考
1	犬上	多賀町	四手	体部片 2点	須恵器杯蓋、土師皿、羽釜	多賀町埋文報告第3集 四手遺跡	?	
2	犬上	多賀町	久徳(3)	体部	土師皿・壺・ミナ7蓋、須恵器壺	多賀町埋文報告第9集 久徳(3)・敏満寺	10C?	
3	犬上	多賀町	久徳(3)	体部	土師器壺	同上	?	スス付着
4	犬上	多賀町	久徳(3)	体部	土師皿・椀、須恵器蓋・壺	同上	9C末~10C	
5	犬上	多賀町	久徳(3)	体部	須恵器杯身	同上	?	
6	犬上	多賀町	久徳(3)	体部	なし	同上	?	内面スス
7	犬上	多賀町	久徳(2)	体部	なし	多賀町埋文報告第8集 久徳	?	1点外面に二次焼成
8	犬上	多賀町	久徳(2)	口縁部	灰釉・黒色・須恵器蓋・壺・短頸壺	同上	9C後半?	
9	犬上	多賀町	久徳(2)	口縁部	須恵器杯、土師器杯	同上	9C後半?	
10	犬上	多賀町	木曾	体部	---	平井美典氏の御教授による	?	
11	犬上	彦根市	多景島I	口縁部	---	多景島湖底遺跡I	?	外面スス
12	犬上	彦根市	竹ヶ鼻・品井戸(4)	口縁部	---	竹ヶ鼻・品井戸遺跡(4)	?	
13	犬上	甲良町	下之郷	口縁部	須恵器杯蓋	ほ場XVII-2 下之郷遺跡	?	口縁部・外面スス
14	犬上	甲良町	北落遺跡	口縁部	須恵器杯・蓋、土師器杯、灰釉椀・皿、黒色椀・壺	ほ場XXI-4 北落古墳群I	10C前	
15	愛知	彦根市	出落	体部	---	辻川哲朗氏の御教授による	?	
16	愛知	湖東町	畑田庵寺	口縁部・体部	不明	近藤澄氏の御教授による	?	
17	菰生	近江八幡市	金剛寺遺跡	体部	黒色土器など	ほ場XXXIII-8 金剛寺遺跡	?	
18	菰生	近江八幡市	御所内遺跡	全体の1/2	---	ほ場XX-8 御所内遺跡II	?	
19	菰生	近江八幡市	御所内遺跡	体部	---	ほ場XXIII-6 御所内遺跡	?	
20	菰生	近江八幡市	森ノ前4次	口縁部	土師皿	近江八幡市埋蔵文化財調査報告書IX	9C?	

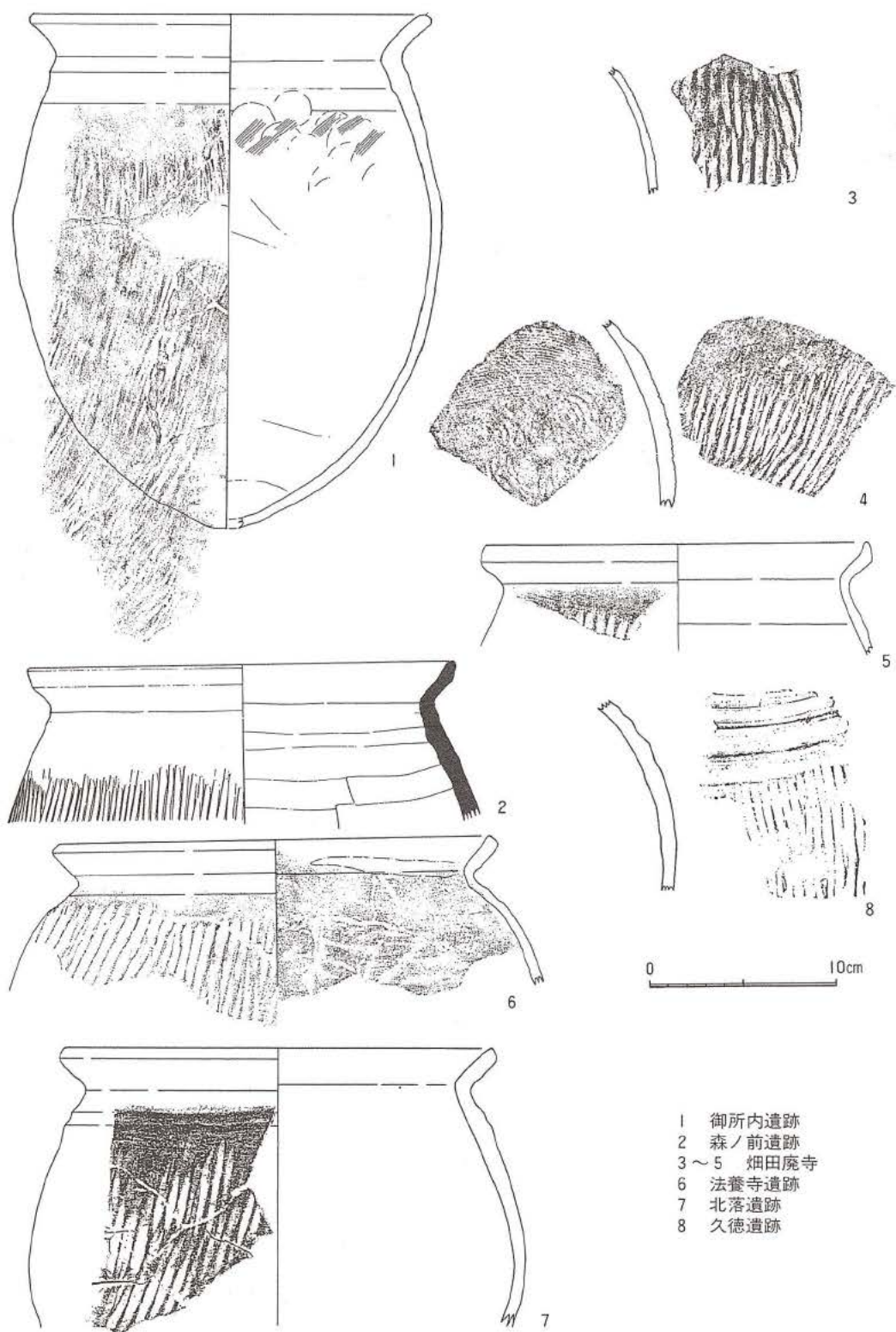
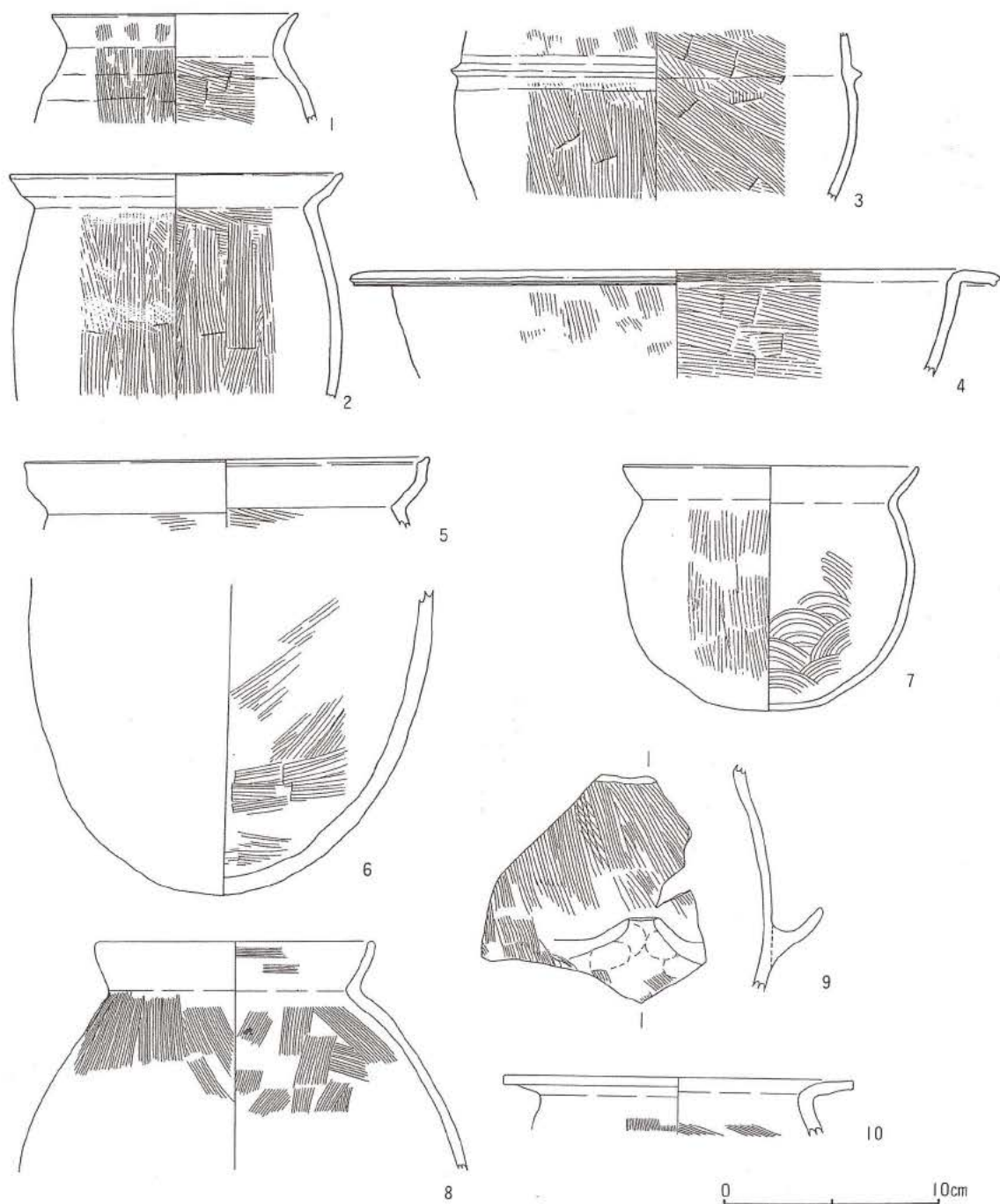


図2 「甲良甕」実測図



1～4 下之郷遺跡 文献6より転載
 5～7 尼子遺跡 文献7より転載
 8～10 尼子南遺跡 文献8より転載

図3 甲良町域における8世紀代の煮沸具

いては「甲良甕」が一時的に煮沸形態における中心的器種として用いられたと考えたい。

愛知・神崎郡 それぞれ1遺跡において確認できた。^②調査量も少なく、現時点での地域内における評価は難しい。

蒲生郡 3遺跡において確認されている。古代末にあたる遺跡の調査件数が多くないことを考慮しても、調査例に比して出土量が少ない印象はぬぐえない。この状況から、煮沸形態における中心的器種としてのあり方を想定するのは難しく、散発的なものであった可能性が高い。

以上みてきたように、分布の中心は犬上郡の東半にある状況がみられた。残念ながら、時期を比定できる資料は現在のところ得られていない。「いわゆる甲良甕」のおよそ年代を比定するために、次節では、分布の中心である犬上郡東半のなかで資料数の多い甲良町域において、古代末における煮沸具の流れをたどっていききたい。

4. 甲良町域における煮沸具の流れ

近年、近江を含めた煮沸形態の土器についての総合的研究が発表された。以下は先学によりながら甲良町域の古代における煮沸具の流れを概観しておきたい。というのも、古代の甲良町域において煮沸形態における中心的器種にあたると考えられるものが「近江型甕^③」と「いわゆる甲良甕」しか確認できない点、さらに共伴資料から「近江型甕」から「いわゆる甲良甕」へという先後関係が想定できることから、「近江型甕」の消滅が「いわゆる甲良甕」の出現期を考える傍証となり得ると考えるためである。

甲良町域において長胴形で外面調整にタテハケを多用するいわゆる「近江型甕」が出現するのは集落が安定して営まれ始める7世紀代と考えられている。器面調整と口縁部の形状に変化がみられるが、長胴丸底という基本形状に大きな変化は見られない。8世紀後半代においても尼子南遺跡SH1で出土している様に、(文献7) 8世紀代^④においては煮沸具に基本的変化はないものと考えたい。このことから、「近江型甕」から「いわゆる甲良甕」への変換は、9世紀代のなかで起こった可能性が高い。

次に問題になるのが、「近江型甕」と「いわゆる甲良甕」の製作技術上の連続性である。この問題を考える前に、8世紀代の甲良における「近江型甕」の製作技法を確認しておきたい。まず、底部に粘土板を置き、その上に粘土紐を巻き上げてバケツ状の祖形を作る。先後関係は問えないが、底部は内面からタタキ出して成形、外面上半はタテハケ、底部にケズリを施す。口縁部を外反させた後、内面からコテ状の工具をあて、外面からナデを施して整形し、受口状の口縁を作り出

す。色調はにぶい黄橙色から浅黄色を呈し、胎土には長石、クサレ礫や花崗岩系砂粒を含む。焼成方法は底部に黒班が認められることから、焼成にタテ置きしたものと考えられる。

「いわゆる甲良甕」の製作技法は前節で検討した。ここで「近江型甕」と「いわゆる甲良甕」の製作技法の違いを整理したい。

- ①体部から底部の外面調整が前者がタテハケのち底部にケズリを施すのに対し、後者はタタキのみで成形すること。
- ②口縁部の形状が、前者がコテ状工具を用いて受口状に作るのに対して後者はナデを多用し軽く外反させたものであること。
- ③黒班の位置が前者が底部にみられるのに対して後者は体部にみられる。これは、焼成方法が前者が縦置きによるのに対し後者がヨコ置きによるものであること。
- ④前者が長胴形であるのに対し、後者は中胴形であること。
- ⑤胎土が前者に比して後者がきめ細かな精良なものをを用いること。
- ⑥色調が全く異なること。

⑥は⑤あるいは③のいずれかに起因する可能性が考えられるが、現時点では原因を特定できない。①から④の相違点を評価するならば、両者は「甕」の形状に留まらず製作技法においても全く共通性が見出せないものと言える。少なくとも製作技法において両者は断絶していると見なせる。

「いわゆる甲良甕」の出現時期については、9世紀代の可能性のある資料も散見され、「近江型甕」がみられなくなる9世紀代には少なくとも存在していたと考えるのが妥当であろう。また、消滅時期についても、明確な資料は得られていないが、11世紀以降の資料には見出せないことから、10世紀代における可能性が高い。「甲良甕」の時期を9から10世紀頃のいわゆる古代末におけると考えたが、この点についても資料の増加を待って改めて検討したい。

5. 現時点でのまとめ

「いわゆる甲良甕」について、以上の知見をまとめると、次の四点にまとめられる。

- ①甲良甕の形態について述べた。外面のタタキと白っぽい発色と精良な胎土が印象的であることから破片でも認識が比較的容易である。
- ②分布範囲については、犬上郡東半域を中心に、犬上・愛知・神崎・蒲生の4郡にも分布する。
- ③先行する「近江型甕」とは製作技法において断絶がみられる。
- ④時期については9から10世紀頃のものともみられる。

ここで注目したいのは、②にあげた分布域である。「いわゆる甲良甕」の生産と流通が郡域と必ずしも一致していない事実は重要である。この点から次に述べる2通りの見解を導くことができる。

現状の出土状況からは、分布の中心である犬上郡東半において「いわゆる甲良甕」が生産され、犬上・愛知・神崎・蒲生の四郡に流通していたという見解である。これは、近江産無釉陶器にみられる生産流通のあり方と類似したものといえる。この場合、資料数は増加するであろうが、分布の傾向は大きくは変わらないといえる。

一方、犬上郡東半が他地域に比して調査が非常に多い点を考慮するならば、犬上郡東半以外の地域においても今後資料が増加する可能性は残されている。この場合は犬上郡東半以外の地域においても生産地が見つかる可能性も考えられる。

現在の資料数からは、「いわゆる甲良甕」の分布が律令制の崩壊の流れを反映したものなのか、あるいは律令期の地域構造の多様性もしくは重層性を反映するのか何れとも判断がつかない。古代末の土器群全体を視野に入れた研究が必要であると同時に、より多くの検証手段を得る必要がある。以上の点を踏まえ、今後の資料の増加を待つて再考を期すものとした。

末筆になりましたが、本稿をまとめるにあたってその多くを畑中英二氏と辻川哲朗氏の研究に依拠した事実を謝意を込めて記し、またあわせて御教示御鞭撻いただいた以下の方々に誠意を示し、本論を締めくくりたい。

(順不同、敬称略) 細川修平 大崎哲人 大崎康文 堀真人 平井美典 奈良俊哉 田中明 山西敬子 夏原善治 林定信 喜多貞祐 植田文雄 田路正幸 中村健二 音田直記 小泉裕司 岩橋隆浩 藤崎高志 近藤滋 山口至 宮本文江

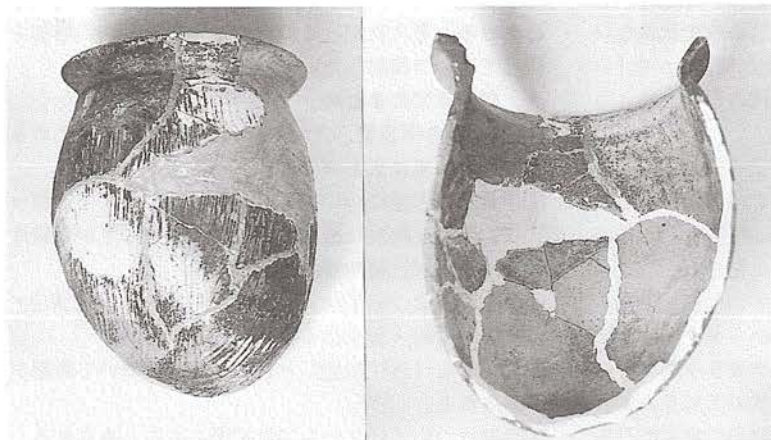
(重岡 卓)

註

- ① 平城京においても「甲良甕」が一点確認されているとのことであるが(文献2、3)、実見には至っていない。資料を実見したうえで改めて検討することとしたい。
- ② 近藤滋氏と藤崎高志氏の御厚意により、畑田廃寺出土土器の一部を実見する機会を得た。その中で、煮沸形態については本論で取り上げた「甲良甕」以外にも1点のみではあるが南河内内産の甕が出土していることを付加しておく。なお、畑田廃寺出土土器については別稿を用意しており、機会をあらためて論じたい。
- ③ 「近江型甕」の名称は先学により問題点が指摘されている(文献3)。本論では対称地域が限定的である点を考慮して、論の複雑さを省きながら円滑に進めるため、いわゆる「近江型甕」の旧称を用いることとする。
- ④ 甲良町域における竪穴住居の消滅を従来の見解では8世紀中頃に想定していた。しかし、尼子南遺跡SH1を評価するならば、8世紀後半まで竪穴住居の存続期間を認めるのが妥当であろう。

参考文献

- 文献1 古代の土器2 古代の土器研究会編
文献2 古代の土器3 古代の土器研究会編
文献3 古代の土器4 古代の土器研究会編
文献4 重岡卓「湖東系軒瓦の基礎研究」紀要10 県協会
文献5 ほ場XVII-2下之郷遺跡 県教委 県協会 1992
文献6 ほ場XXII-4 在士北2・尼子・小川原2 県教委・県協会 1995
文献7 ほ場XXIII-4 尼子南2・尼子西1 県教委・県協会 1996



御所内遺跡・出土土器(図2-1)
左：外面
右：内面